

令和元年度 卒業生満足度調査結果報告書

〔 群馬医療福祉大学 〕

本調査は毎年実施している「在学生満足度調査」から、令和元年度に実施した卒業見込みの4年生（対象247人、回答212人、回答率85.8%）にかかる調査結果を抽出して報告するものである。

分析にあたっては主な質問事項において「満足していた」と「どちらかという満足していた」を「満足グループ」、「不満であった」と「どちらかという不満であった」を「不満グループ」とし「どちらともいえない」を加えた3分類として比較検討する（項目によっては5分類の場合もある）。

問1 入学決定時の気持であるが「満足」は67%、「不満」は9%となっており、昨年度と比較して満足の割合が下がり、不満の割合が高くなっている。

問2 教育理念について知ったのは「入学前から」は53%、「入学後」は40%となっており、昨年度と同様にオープンキャンパスなどによる本学の理念の周知や入学後のフレッシュャーズキャンプなどによってほとんどの学生が理解していることが読み取れる。一方で「今回初めて知った」も7%存在しており、昨年度と比較して若干改善されているが、よりいっそうの周知が必要である。

問3 教育目標についても問2と同様に93%は理解しているが、今回初めて知ったという者は7%おり、昨年度と比較して若干改善されているものの、今後の課題として残されている。

問4 次に、「教育理念」や「教育目標」を感じる機会としては、2018年度は講義を受けている時や、学園祭やスポーツ大会への参加が多かったが、2019年度は講義を受けている時や授業で発表をしている時など、講義の時間に「教育理念」や「教育目標」を感じる事が多く、本学の教員の努力の成果が表れている。

問5 教育に関する取り組みの満足度は「クラス担任制」、「専門教育」、「基礎演習」など、調査内容のほとんどにおいて、満足と回答した者が50%を超えている。「外国語教育」の満足の回答割合は、昨年度の38%から49%に上昇しており、海外研修プログラムなど、本学での取り組みが評価されたものと考えられる。

問6 学生が何に意欲的に取り組んできたかの問いには、「専門的な知識を身につける」と「幅広い教養を身につける」を選んだ学生が多く、「外国語を身につけること」を選んだ学生は少ない。この傾向は昨年度と同様である。

問7 受講してきた授業での不満についての問いには、「不満な授業はない」が最も多くなっている。この傾向は昨年度と同様である。「教員の一方的な授業」や「授業内容が難しい」の回答者が多いのも、昨年度と同様である。一方で「施設・設備が充実していない」の回答者が少なくなっており、Wi-Fiの環境を新設したことなどの本学の取り組みが評価されたものと考えられる。一方で教員の教育姿勢に関わる「教員の指導が十分でない」の回答者が増えており、FD研修などを通じて、教員に対する研修を充実していくことが必要である。

問8 昨年度と同様「専門分野の授業が充実している」、「実験・実習に十分な時間が確保されている」、「資格取得に役立つ」が6割を超えているが、「高校で学んできたこととの結びつきがわかる授業が多い」については低い。これは、本校の特徴である資格取得にかかる専門科目が多いためでもあり、やむを得ないものと考えられる。一方で「選択できる授業科目が充実している」の回答割合が昨年度と比べて少し増え、今後もカリキュラムの改善を通じた、魅力のある授業を提供していくことが求められる。

問9 昨年度と同様に、本学の教員に関しては「授業の進め方や指導法をよく工夫している」と「教育指導に熱意を持っている」など大半の設問項目において6割以上の学生が高い評価をしている。「授業以外でも教員とコミュニケーションがとりやすい」と回答した学生は、昨年度が64%であったのが、今年度は71%に増えている。本学は教員一人当たりの学生数は群馬県内の私立大学では最小であり、少人数教育というバックアップ体制が有効に機能している。

問10 本学で身につけたことについては、昨年度と同様に「社会のために行動する力」や「相手の意見を丁寧に聞き内容を正確に理解する力」など多くの設問に対して医療・福祉を学ぶ学生としての基本的なことを身につけてきた。また、「数式や図表を使って表現・分析する力」や「外国語に関する面」の回答割合が低いことも昨年度と同様である。なお、今後さらに身につけたい事項としては「コミュニケーション能力」に関するものが昨年度と同様に多い。一方で「目標の達成に向かって取り組み続ける力」、「周囲の状況に配慮して行動する力」、「社会の規範やルールに従って行動する力」などを挙げた学生が昨年と比べて増えている。

問11 本学への総合満足度で「入学してよかった」については「満足」は59%、「満足していない」が14%という結果になっており、入学時の「満足」からやや低下している点は昨年度と同様である。社会へ巣立つ学年にとっては、社会人として身につけておくべき能力の水準に達していないと考える学生が少なくない点も影響していると思われる。

問12 所属していた学科への満足度は「満足」が68%、「どちらともいえない」は25%、「不満」は7%となっている。「どちらともいえない」層をどのように「満足」に転換させられるかが今後の課題である。

問13 本学を後輩や兄弟に進めたいと思うかという設問については「勧めたい」は48%、「どちらともいえない」が37%、「勧めたくない」は15%となっている。昨年度と比較して、「勧めたくない」が微減し、「どちらともいえない」が微増している。本学の総合満足度で「満足」と回答した学生の中で、少なくとも10%以上の卒業生は「勧めたい」を選択していないことが読み取られ、その理由を調査して、今後の本学の教育に活かしていくことが必要である。

まとめ

職場や地域社会などで仕事を始めていくことが目前に迫っている中で、総じて卒業年次の学生は、社会人として身につけておくべき能力について、まだまだ足りていないと考えている学生が多い。経済産業省が2006年に提唱した「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」（主体性、働きかけ力、実行力）、「考え抜く力」（課題発見力、計画力、創造力）、「チームで働く力」（発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力）の3つの能力（12の能力要素）がある。この中で本学の多くの卒業生は、主体性、実行力、協調性などの社会人基礎力を身につける必要性を感じている。昨年度と比較して、今年度はこの傾向が強く出ている。

本学社会福祉学部では今年度から1年生全員を対象に「サービス・ラーニングⅠ」の科目を開講した。この科目は大学近隣の地域の様々なフィールドにおける課題解決のための取り組み企画することを通じて、地域社会の様々な実践に触れて、学生自身の学修の深化とコミュニケーション能力・社会性・協調性・行動力といった社会人基礎力を培うことを目的としている。サービス・ラーニング教育を効果的に展開し、本学の学生が身につけたいと考えている社会人基礎力を磨くために、授業内容や教職協働による実施体制の検討、学生アンケートの実施など、PDCAサイクルを機能させ、今後も教育の質向上に努めていく必要がある。